

第1回国際生物学賞シンポジウムについて

岩 槻 邦 男 (植物園)

1. 背景—国際生物学賞と国際シンポジウム

基礎生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、学術の進歩に大きな貢献をした研究者を顕賞するために、国際生物学賞委員会が、1985年4月25日に発足したことは、報道などを通じて耳にされた向きもあることと思う。同委員会では、第1回国際生物学賞を系統・分類学を中心とする生物学の分野の研究に授与することとし、内外の関係機関や有識者に推薦を依頼したところ、大きな反響を呼んで数多くの推薦が届けられているとのことである。

国際生物学賞委員会は有沢広己学士院長を委員長とし、35名の委員で構成されているが、東大理学部の名誉教授から茅誠司、原寛、小林英司、江上信雄の諸先生も加わっておられ、岩槻も委員を務めている。この賞は天皇陛下御在位60年と陛下の長年にわたる生物学の御研究を記念し、生物学の奨励を図るために設けられたものであり、寄附金による特別基金を日本学術振興会に設け、同会に事務局を置くものである。

国際生物学賞の授賞式に並行して、受賞者に関連の研究分野の国際シンポジウムを開催することが定められており、文部省の国際シンポジウム開催経費で開かれることになっている。第1回の受賞対象分野が系統・分類学を中心とする分野であることから、東京大学理学部でこれを引き受け、

準備を進めることとなった。

2. 趣旨—「生物の種の現代像」について

系統・分類学を中心とする生物学と限定しても相当広い範囲を包含しており、受賞者の研究分野とどこまで整合性のあるテーマを設定できるかは予測不能の問題を抱えて、ずい分難かしいことである。そこで、対象とする生物の種属にそれ程こだわらなくてもよいテーマを設定しようという意図から、生物の種はどのように実在しているかという問題について、特に最近における分子レベルの研究の進歩もとり入れ、生物界を通じて論議のできる場を設定することを企画することとした。

6月の教授会で、このシンポジウムを理学部主催で行うことについて了承を得たが、企画を詰めるための準備委員会には、有馬学部長をはじめ、学部内から上田(動物)、飯野(植物)、重井(臨海)、岩槻(植物園)と、学外から江上信雄(公害研大理)、森脇和郎(遺伝研)、上野輝哉・館岡亜緒(科博)の方々にも加わっていただき、理学部事務務や東大国際交流課のバックアップを受けている。

生物学において、種 Species は種属を認識するための基本的な単位として使われてきたものであるが、その実体の説明は生物学における最重要の課題の一つである。これまで生物相を明らかにしていく過程で、主として形態的特性に基いて認識

されてきた種が、生物学におけるさまざまな研究方法（研究室では微細構造や分子のレベルも含め、野外では集団解析の手法を拡大することによって）の発展に伴って、実在の単位として存在しているかどうかの疑問を投げかけられるようにさえなってきた。そのような研究の現状を踏まえて、種について生物学はどこまで知るようになっているかを、この分野における研究の総括と代表的な研究の実例を紹介してもらい、それに関する討議を深めることによって探りたいというのがこのシンポジウムの目的である。

3. 内容と日程

国際生物学賞の授賞式が11月15日に予定されていることから、このシンポジウムは11月16日(土)から始められる。16日は9:30~16:30の間学習院大学創立百周年記念会館で公開で開かれる。

受賞者(10月に決定する予定)の記念講演のあと、Modern Aspects of the Speciesの演題に入り、基調講演は植物学分野からPeter H. Raven(ミズーリ植物園)と動物学分野からWalter Bock(コロンビア大)のお2人をお願いする。午後は、染色体レベルの研究によって種の自然界における存在様式がどのように明らかにされているかをFriedrich Ehredorfer(ウイーン大)館岡亜緒(科博)今井弘民(遺伝研)の3人の問題提起によって、もう一つのセッションでは、分子レベルの研究の進展によって種の実体はどのように解明されるのかをFrançois Bonhomme(モンペリエ大)、Leslie D. Gottlieb(カルフォルニア大)、酒泉満(臨床医研)の3人の話題提供を通じて討議できるように計画されている。話題提供の演題についてはまだ最終決定をみていないが、いずれポスターなどでお知らせできる筈であるので御承知いただきたい。なお、夕方にはレセプションも計画されている。

11月18日(月)には、植物分野は植物園で、動物分野は国立科学博物館で、16日に提起される問題に関して、更に具体的な研究成果を披歴しながら密度の濃い議論を重ねる予定である。

4. 意義と期待される成果など

お招きする外国人研究者は、年齢では32歳から58歳までと拡がり大きいのが、現に最も積極的に活躍しておられる方々であり、訪日は初めてという方が多い。それだけに、この分野の日本の研究者と膝を接して語り合う機会をもつことの意味は大きい。また、種の問題について、対象によって動物と植物で別々に研究している日本の系統・分類学の分野と遺伝学の分野の研究者が一堂に会して論じ合う機会も最近では無かっただけに、文献情報によるだけでなくホットな情報交換によって、この分野の研究の発展にとっては貴重な機会を提供することになるだろう。この分野の研究のレベルが、それを可能にするところまで高められたことが、このような機会を作ることを可能にしたものと思う。

訪日する研究者と日本の研究者がお互の論議を通じて得るところが大きいのはいうまでもないが、更に、可能ならば受賞講演も含めて、シンポジウムのProceedingsを出版することにより、その成果をより広く周知することができる。その意味で、真に国際的な視点でみても、この企画は時宜を得たものといえるだろう。

この国際シンポジウムは、国際生物学賞との関連でこれから続けられていくその第1回である。最初の企画を東京大学理学部でお引き受けしていることから、準備から成果の刊行まで、第2回以後の良い意味での前例を作るように計画を進めていきたい。

今回の国際シンポジウムについては、限られた時間で企画を進めることになったために、多くの方々の御協力を得て準備を急ぎ進めているところであるが、折角の機会でもあるので、ヒトという種に属している生物の1人として、理学部からもできるだけ多くの方々がこのシンポジウムに参加され、いろいろの立場から種の問題を考える一日をもたれるようおすすめして、御協力をお願いする次第である。